

中央アジア彩釉陶器の登場とその系譜

The birth and genealogy of Uzbekistan glazed pottery

佐々木 達夫

Tatsuo Sasaki

本論の目的

同じ時代に異なる地域で類似した物が作られる。偶然の場合もあるが、技術やイメージが移転した場合もある。生活容器の陶磁器も異なる地域の遺跡出土品を比較すると、形や釉、文様の関連が見える場合がある。同じ、あるいは異なる地域で、同時代ばかりでなく前時代の技術系統が見える。同じ種類ばかりでなく、異なる素材で製作技術や形態、文様が作られることもある。

本稿は中央アジアで彩釉陶器が登場し発展の基礎を築いた9世紀後半から10世紀前半頃の様相を、地域外からの技術影響を主な要因として読み解くことが目的である。中央アジアの遺跡に残る考古学資料としての施釉陶器を観察し、資料素地の化学分析等を行い、中央アジア緑彩陶器、多彩釉陶器の技術系譜を中国からメソポタミア（以後イラク、今のイラクは9世紀にイラクと呼ばれた地域と重なる）、そして中央アジアへという、地域を超えた伝播と変遷を論じる。

なお、10世紀から11世紀に中央アジア施釉陶器の技術・文様として定着し、独自の発展を遂げた多彩釉刻線文陶器は、現代の陶磁器産業に継続している。その前段階に登場した陶器、すなわち中央アジア施釉陶器が登場したころの遺跡出土品が本稿で扱う基本資料である。

1. 文明間海上交流に伴う陶磁貿易の活発化と中国白磁の影響

(図1. 9～10世紀ユーラシア大陸陶磁器生産技術の拡散と交流。図2. 白濁釉陶器出土のアラビア湾岸遺跡。図3. サマラ遺跡。)

8世紀後半から9世紀、海上交通による長距離貿易が大文明圏間で活発化した。インド洋を往来する唐とアッバース朝の海上貿易も、そうした文明間交流の一つである。中国白磁（白い素地に透明釉をかけた磁器）が8世紀後半からインド洋海上貿易の発展によってイラク地域に運ばれたことが20世紀初のサマラ遺跡発掘品で明らかにされた。唐代白磁が唐から西アジア地域へ主要輸出品の一つとなった歴史の発見である。

当時、アジアの西側にアッバース朝が栄え、8世紀後半から9世紀に富の集中でバグダッドやサーマラー（以後サマラ）の支配層や都市住民の生活が向上し、質の高い日常物

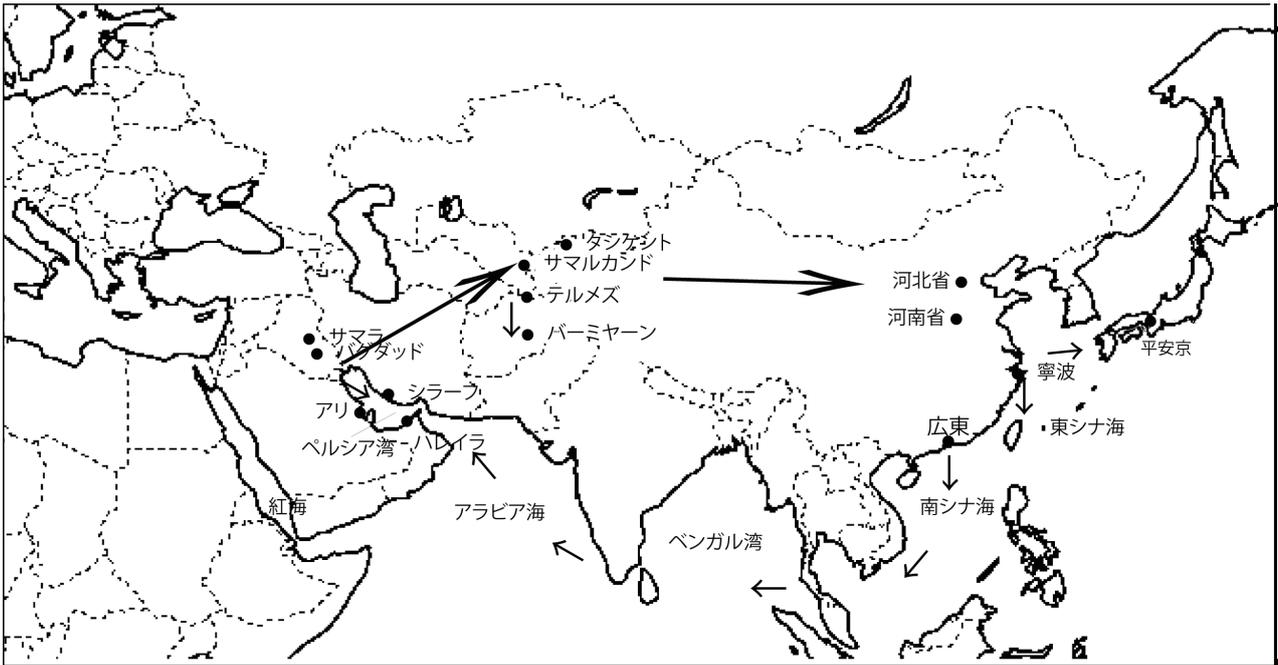


図1 9～10世紀ユーラシア大陸陶磁器生産技術の拡散と交流

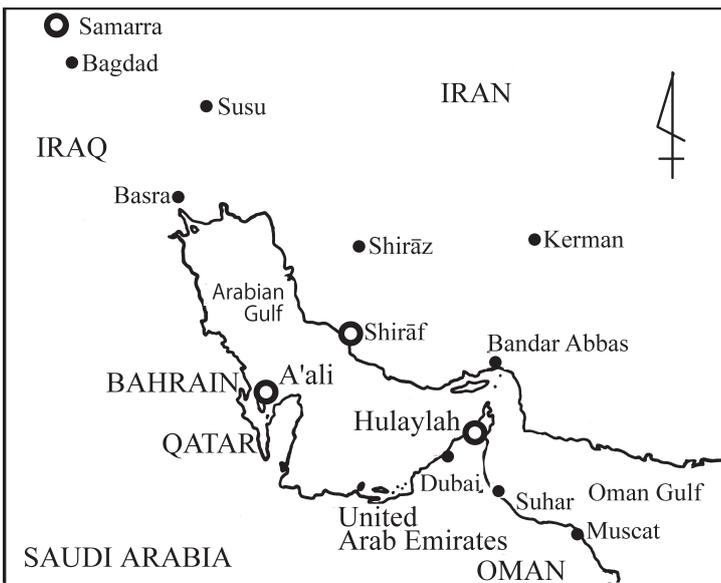


図2 白濁釉陶器出土のアラビア湾岸遺跡

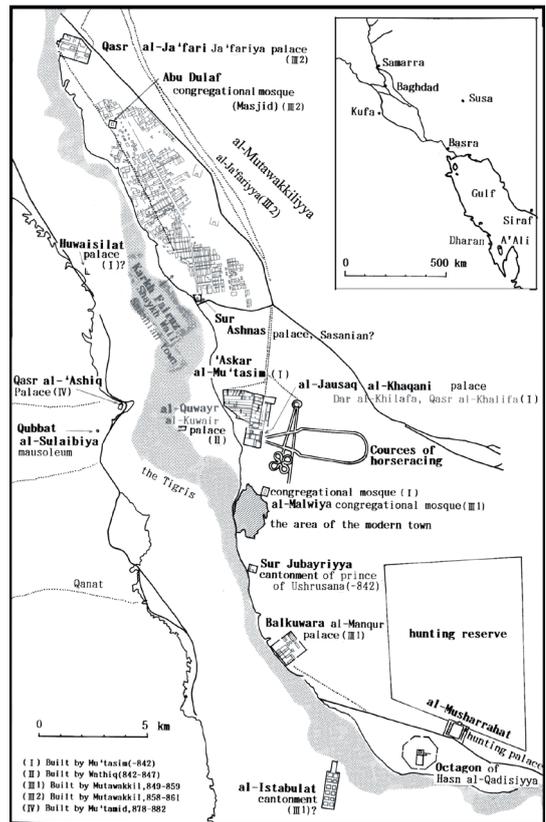


図3 サマラ遺跡

資への需要が増え、南シナ海、インド洋、ペルシア湾（以後アラビア湾）を經由した唐とアッバース朝の遠距離海上貿易が盛んになった。旧唐書の海上交通路記載文やバンボール遺跡資料などはその状態を伝える（佐々木 1987）。シラーフを拠点としたペルシア商人やアラビア商人は季節風利用の木造帆船で主に広東港に向かった。中国側の事情でときには東南アジアの商人が、そしてペルシア商人も東南アジアの港を拠点として中国貿易に従事した。いわゆる海のシルクロードを通して唐代白磁も貿易品の一つとして、イラクの港町バスラに運ばれた。

8世紀後半から9世紀ころ、唐代の河北省地域と河南省地域で異なる形態の白磁が作られた。この時代に白磁を作ったのは世界中でこの地域のみである。磁器材料の陶石発見の難しさ、高温焼成技術の難しさ等から、唐代白磁はこの地域の工業的な特産品となった。平安時代の日本に輸入されたのは河北省白磁のみで、河南省白磁は日本に運ばれなかった。河北省の鞏県（以後鞏義市）白磁がもっとも優れ、素地の厚さが薄く、釉が白く美しい磁器とされた。日本の遺跡と違って、西アジアの遺跡では河北省と河南省の両方の白磁が出土する。取り扱われる貿易品は受け入れ側の物に対する需要と評価が関係していた。

メソポタミアに住む一般人は、高価で量が少ない唐代白磁を手に入れることが難しかった。そのため、イラクに住む陶工は唐代白磁の形を模倣して、良く似た白濁釉陶器碗などを作り始めた（佐々木, 佐々木 2002）。

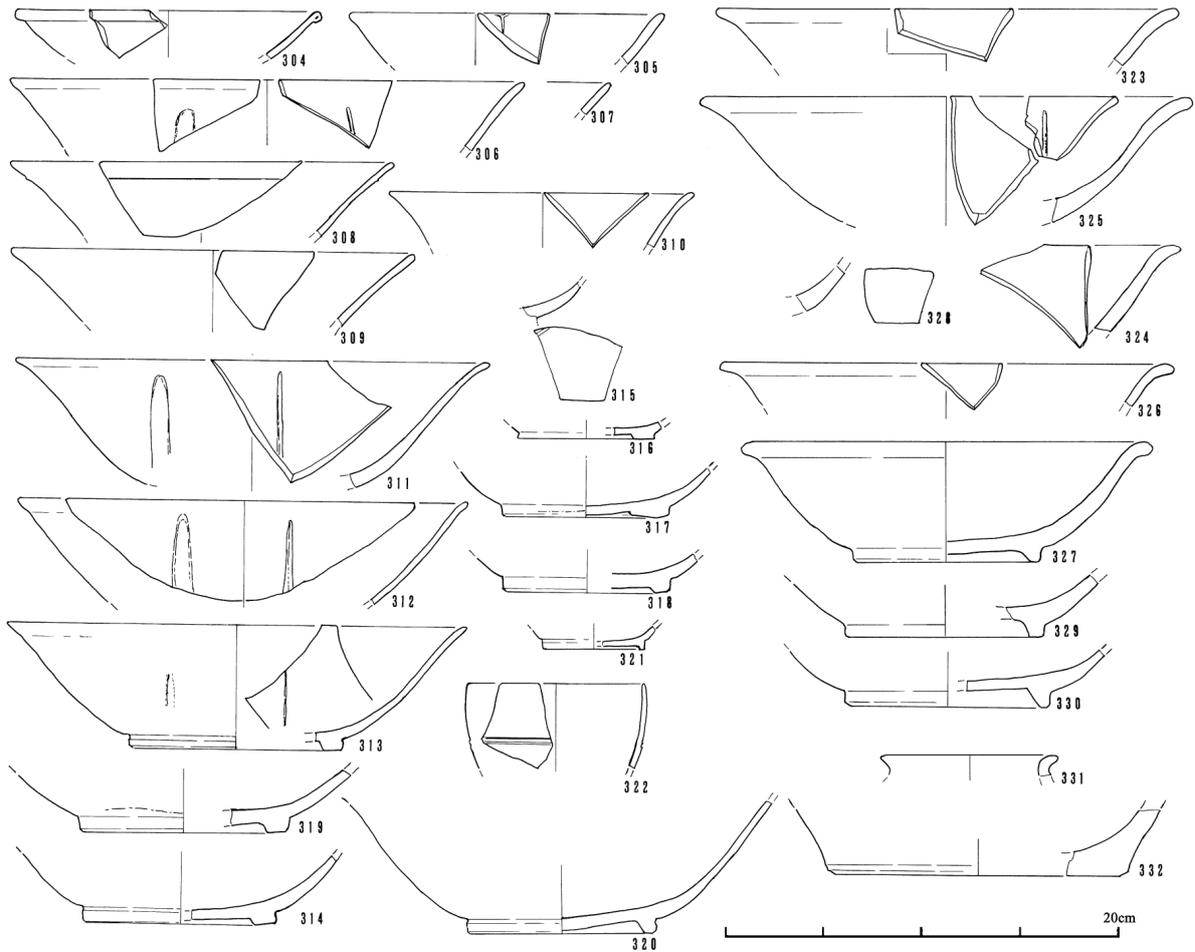
2. イラク白濁釉陶器の流行

（図 4. サマラ出土河北省（左）、河南省（右）の白磁。図 5. サマラ出土白濁釉陶器。図 6. アーリとハレイラ出土白濁釉陶器。図 7. シラーフ出土の河北省白磁・河南省白磁・白濁釉陶器。図 8. メソポタミア・イラク白濁釉陶器と白磁の素地。）

唐代白磁は中国国内で優れた高級陶磁器として評価され、東は日本、西はエジプトなど各地に輸出された。イラクではバグダッドやサマラに住む支配階層や富裕層が日常生活に取り入れたが、その量は上流階層にとっても十分ではなかった。

当時のイラクでは主要施釉陶器に青釉や緑釉を用い、白濁色の釉も紀元前後からイラクに存在したが主要ではなかった。文明間交流が地元産業と人々の趣味へ与えた影響の一つとして、白濁釉陶器の急激な生産量増加が挙げられる。イラクでは以前から存在した石英乱反射で白く見せる白濁釉の技術で（佐々木 1993. Sasaki, et al 1994）、白濁釉陶器の大量生産に成功した。素地は当時のイラクで一般的に用いられた現地産粘土で、やや軟質の黄色に焼きあがる。白濁釉陶器碗に用いた粘土は含まれる石英粒も小さく、水簸された良質な粉状であった。珍奇な奢侈品に近い唐代白磁を模倣した現地産陶器の白濁釉陶器碗が、より広い階層の生活に拡散していく様相は、本稿で取り上げるアーリ遺跡やハレイラ遺跡出土品などにも見ることができる。

白濁釉陶器を作る技術はメソポタミア・イラクにあったが、白濁釉陶器生産に唐代白磁の釉調と器形を模倣する新技術を取り入れたのはイラク陶工であった。生産地から人が移動して伝える技術移転ではなく、製品を見て釉調と見た目の形を模倣する新生産技術に



Chinese white porcelain, groups A(304-322) and B(323-332), from Samarra
 図4 サマラ出土河北省(左)、河南省(右)の白磁

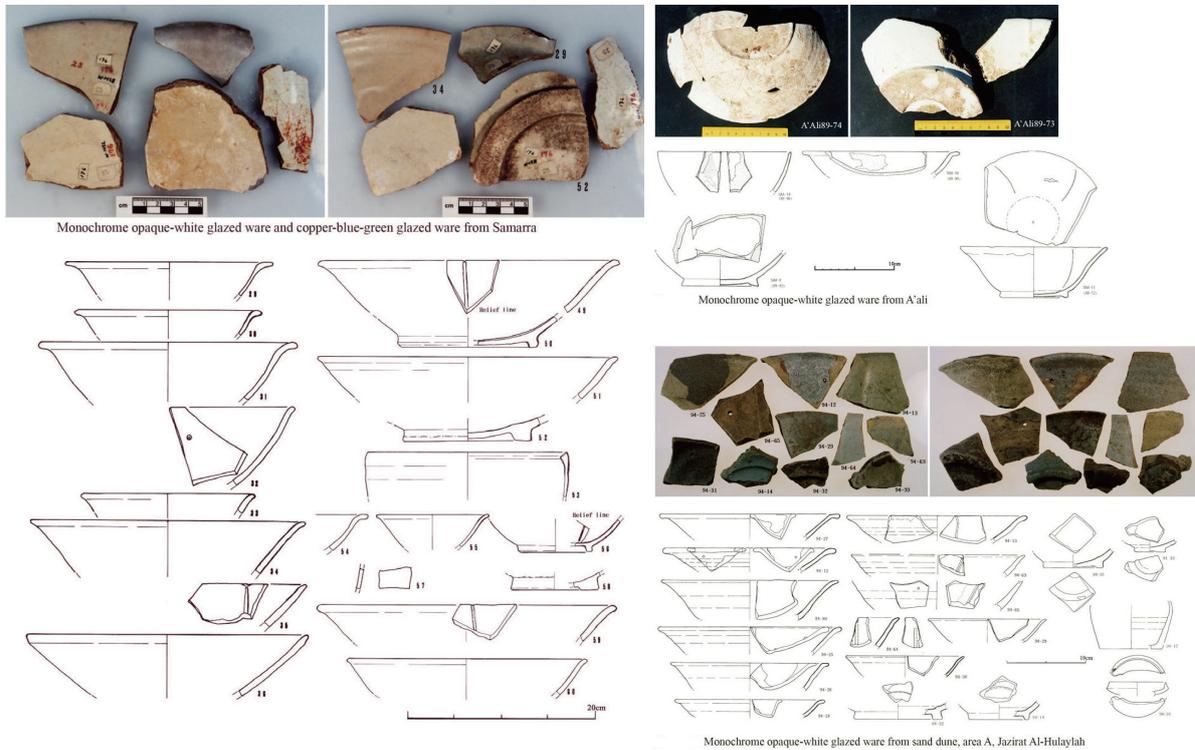


図5 サマラ出土白濁釉陶器

図6 アーリとハレイラ出土白濁釉陶器



Chinese white porcelain, group A, from Siraf



Chinese white porcelain, group B, from Siraf



Opaque-white glazed ware from Siraf



図7 シラーフ出土の河北省白磁・河南省白磁・白濁釉陶器

現地陶工は成功した。白磁模倣を始める前のイラク施釉陶器は青釉・緑釉・青緑釉陶器が多くを占め、白濁釉陶器生産の割合はきわめて小さかった。白濁釉陶器の素地はイラクで一般的な現地産の黄白色軟質の粘土を用い、白磁のように白色で硬質の素地とは異なったが、当時の施釉陶器素地のなかではもっとも質の高い現地産であり、水簸したきめ細やかな粘土で、焼成後も軟質粉状に仕上がった。焼成温度が少し上がり黄色と淡いピンクが混じる素地色に変化するの10世紀頃であろう。釉の白さは釉の石英粒乱反射によるもので、錫呈色による白さはやや遅れて一般化した（佐々木, 酒寄, 他 1998. Sasaki, Shirahata



図8 メソポタミア・イラク白濁釉陶器と白磁の素地

& others 1994. Sasaki, Uchida & others 1994. Sasaki, Uchida & others 1993. Sasaki, 佐々木, 内田, 他 1993. 佐々木 1993. Koezuka & others 1992)。遺跡で発掘される白濁釉は風化で不透明状になるものが多いが、当時の色合いは透明に近いと推定される。発掘後に太陽光が当たると、透明性のある釉は短時間に劣化して白濁し、青釉や黒色ガラスなどが風化で白濁するのと同じである。

白濁釉陶器は、高級金属器を写した河北省の唐代白磁に形態が良く似ており、両者の底部と口縁部外反の形はとくに類似している。河北省白磁碗を模倣した白濁釉陶器碗は西アジア各地の遺跡出土品で主要な製品である。しかし、釉調がやや黄色みがかかり、素地が厚い河南省鞏義市白磁はイラクで模倣されなかった。模倣には現地人の選択が働いていた。

白濁釉陶器は短期間にアッバース朝領内に流通し、貿易品としてもインド洋沿岸地域の大規模遺跡や主要な港湾遺跡に運ばれ、9世紀の白濁釉陶器碗が広範囲で発見されている。ただし、中央アジアも後に独立するまで領内であったが、遺跡に残る白濁釉陶器は少ない。唐から西アジアへ運ばれた白磁は多くが碗であり、イラクでも類似する形態の碗や大皿が多く作られた。

中国白磁が白濁釉陶器を生んだということもあるが、白磁輸入が新たな白濁釉を誕生させたのではなく、流行の刺激を与えた。碗の外反口縁と輪高台の形態が写されたことが、白磁碗と白濁釉陶器碗の模倣関係を考えるうえで重要である。模倣された中国白磁が河北省産で、同時期に輸入した河南省産でなかったことも重要である。こうした点はすでに指摘している（佐々木, 佐々木 2002）。

大量生産され始めたイラク白濁釉陶器が各地の遺跡で出土することは、白い器として地域の人々から高く評価され、中国河北省鞏義市白磁碗形態を模倣した碗が流行した背景を伝える。

3. イラク初期彩釉陶器

(図 11・12. サマラ出土イラク緑彩陶器。図 13. ハレイラ出土イラク緑彩陶器。図 14. ハレイラ出土イラク緑彩・藍彩陶器。図 15・16. サマラ出土イラク多彩釉陶器。)

白濁釉陶器はその器面に装飾を描く下地として利用され、彩釉陶器（コバルト藍彩・緑彩・多彩）やラスタール彩陶器が8世紀後半から9世紀にイラクで作られた。イラク初期多彩釉陶器の素地は白濁釉陶器の黄白色軟質と同じで、イラク産であることを示している。文様を描く面が広い皿や盤、鉢が主要製品として愛好されたことが、遺跡から多く出土することで分かる。皿や盤、鉢は碗よりも大きく、食卓で食物を盛る容器に用いられた。金属器やガラス器の文様や形を白濁釉陶器に取り入れる素材の異なる器模倣生産も見られた。同時に、多彩釉刻線文陶器も白い器を利用してイラクで生産された。イラクで多彩釉刻線文陶器が流行する9世紀より以前、すでにビザンチン陶器などは多彩釉刻線文陶器を主要製品として生産していた。イラクの多彩釉刻線文陶器はサマラ遺跡やハレイラ遺跡の出土品にも見ることができる。こうしたことが、中央アジア施釉陶器が登場する直前のイラク施釉陶器の状態である。

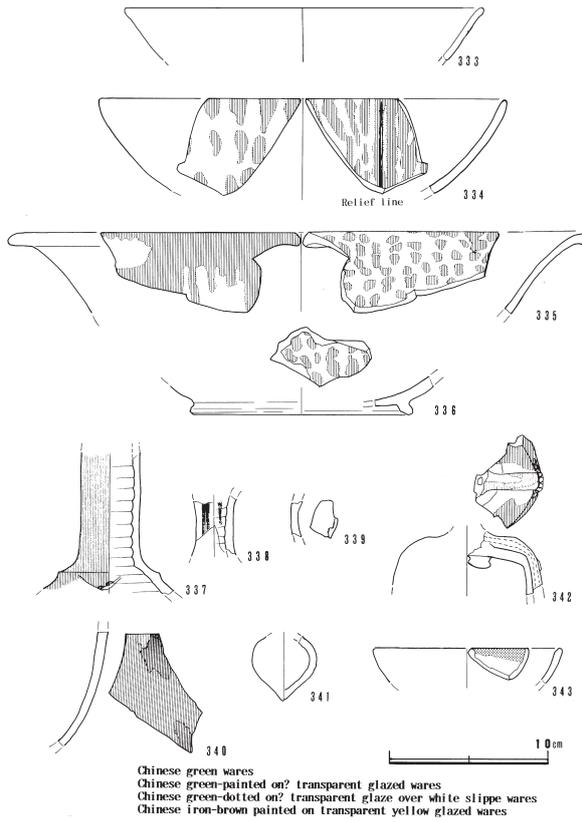


図9 サマラ出土中国緑彩磁器など

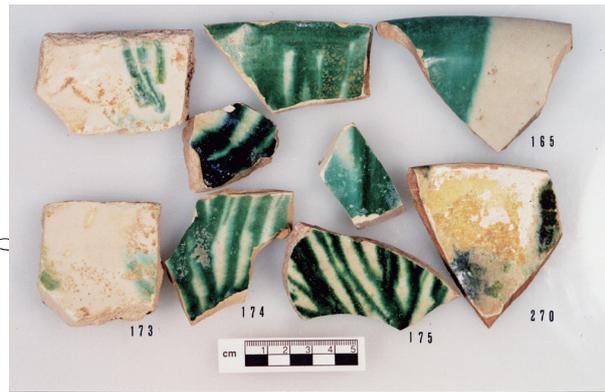


図10 サマラ出土イラク緑彩陶器

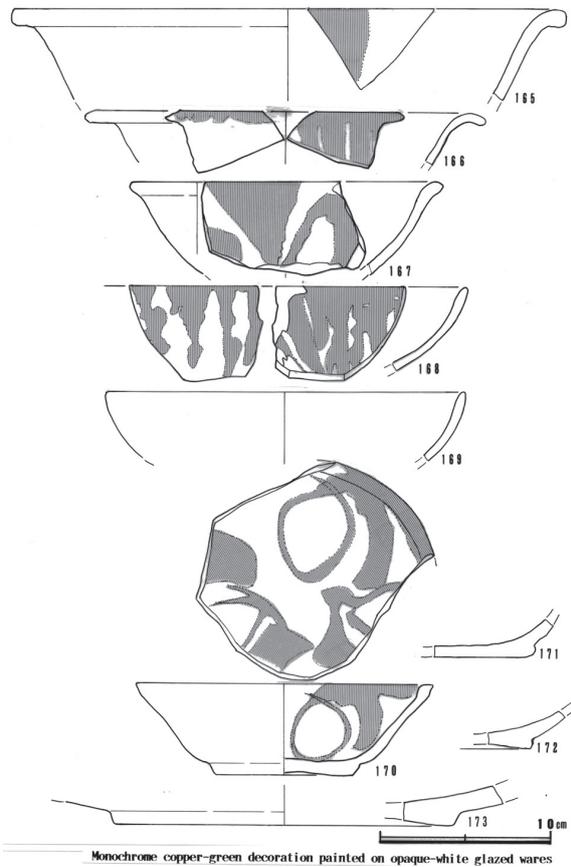


図11 サマラ出土イラク緑彩陶器

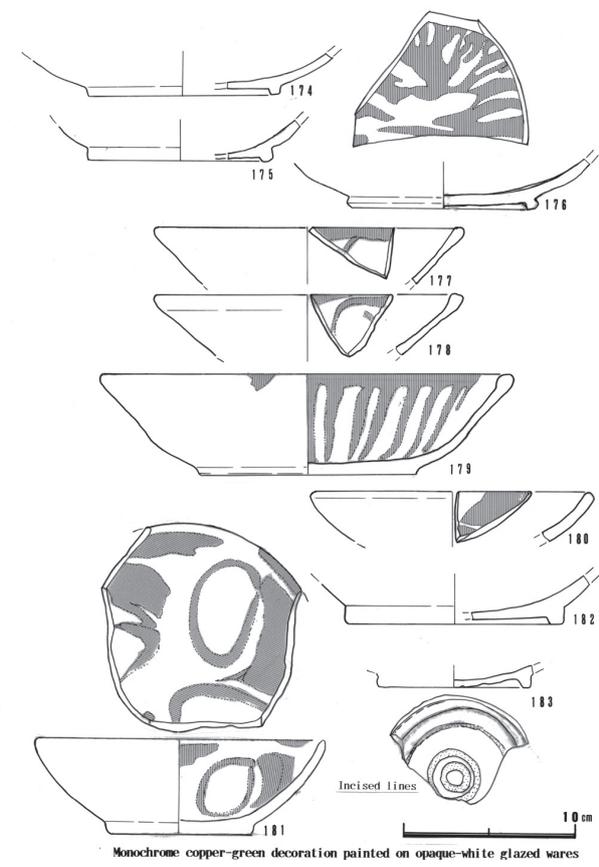


図12 サマラ出土イラク緑彩陶器



図 13 ハレイラ出土イラク緑彩陶器

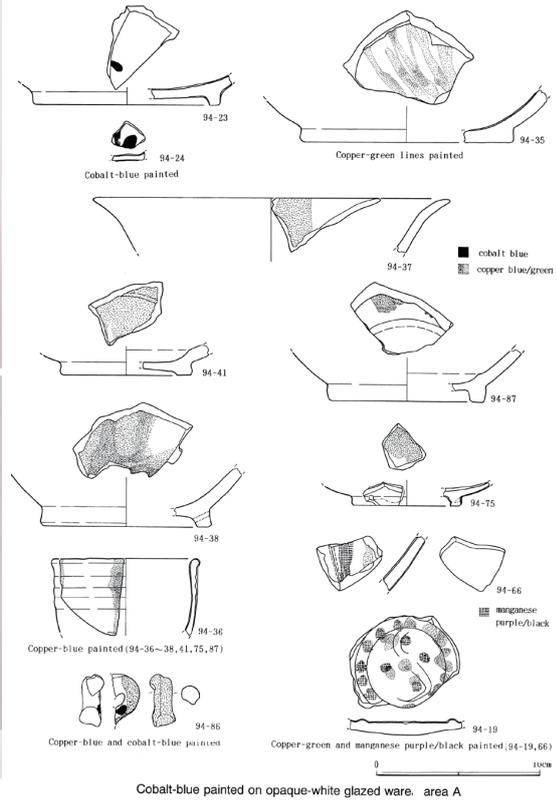


図 14 ハレイラ出土イラク緑彩・藍彩陶器



図 15 サマラ出土イラク多彩釉陶器

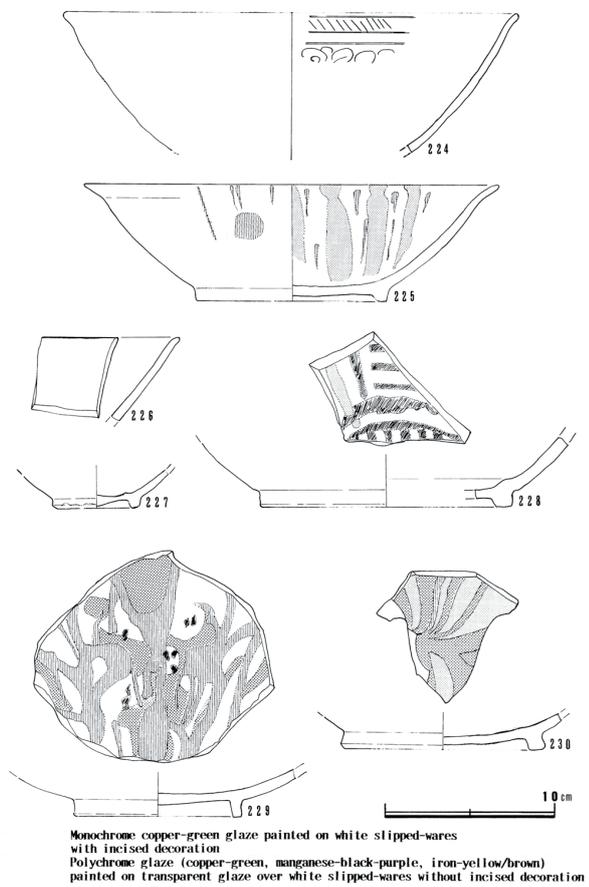


図 16 サマラ出土イラク多彩釉陶器

多彩釉陶器は8世紀前半の唐三彩の影響とも言われるが、西アジアの遺跡から盛唐三彩は出土せず、いわゆるペルシア三彩は時代を遡った唐三彩でなく、サマラなどから出土する同時代の晩唐五代三彩（以後多彩釉、彩釉、緑彩などと記述する）との関連が推定される（佐々木 1995）。サマラ産の多彩釉陶器はイラク多彩釉陶器の最初期の製品であり、一般に知られる10世紀以降の多彩釉陶器とは異なる（佐々木 1995）。同じ9世紀のイラク多彩釉陶器はハレイラ遺跡の発掘でも出土している（Sasaki 1996）。白濁色だけの単色陶器よりも、その器面に多彩な文様を描いた陶器はイラクの人々が好む陶器として広がった。初期のイラク彩釉陶器は淡い色合いの多彩釉に粗い刻線文が施されるものが多い。素地は黄白色から淡いピンクがかり、初期の白濁釉陶器よりやや高い温度で焼成される。中央アジアでは一般的になる白化粧土はなく、黄白色素地に釉をかけている。その製品はサマラ遺跡やハレイラ遺跡などで出土した多彩釉陶器である。産地を示す具体的な窯跡等の証拠はないが、イラクの大都市バスラやサマラが産地と推定される。

イラク多彩釉陶器は中央アジアの多彩釉刻線文陶器の祖型の一つとなった。日本の博物館に同じ種類の蔵品はなく、10世紀以降の赤色素地・白化粧土の多彩釉陶器とも異なり、11-12世紀中心にイランで作られた赤色硬質素地・白化粧土の釉発色が濃い多彩釉刻線文陶器（いわゆるペルシア三彩）や12-13世紀のイラン多彩釉刻線文陶器 *sgraffiat* と異なる。

4. 中央アジア施釉陶器誕生の背景とその後の地域色

中央アジア施釉陶器の祖型はどこに求めることができるか、いつ頃からどこで作られたか。この問題を筆者は取り上げたことがある（佐々木 2009, Sasaki 2009）。イラク彩釉陶器生産技術は中央アジア地域の陶器生産拠点に移転され、新たに作られた中央アジア彩釉陶器が地域内に広がり、類似品が各地で作られたと推測した。

しかし、9世紀末から10世紀初頃の最初期の中央アジア施釉陶器がどのような製品であったか、それは不明瞭である。サマラ出土品に代表される施釉陶器のうち、白濁釉、多彩釉、緑彩（緑釉点彩、緑釉線彩）が、サマルカンドなどの中央アジア初期の施釉陶器（多彩釉、緑彩）と直接の系譜・関連をもっていたか、あるいは東イランなどに関係する施釉陶器があったのか。技術的系譜はサマラ緑彩陶器と多彩釉刻線文陶器がサマルカンド施釉陶器に繋がると推定できる。

緑釉流し掛け陶器（以後緑釉点彩、緑釉線彩）と多彩釉陶器はサマラとサマルカンドの両方にある彩釉陶器であり、両者の関係を推測する手がかりとなる。中央アジアで初期施釉陶器が登場し、その後に中央アジア各地域で形態や装飾に独特の特徴をもつ技術が開発され、そのなかで多彩釉刻線文陶器が代表的な施釉陶器として発展している。

中央アジアの施釉陶器は石英素地が登場するまで焼成後の色は赤色粘土素地が一般的である。赤色素地の器面が白土や白濁釉で覆われて装飾用白下地となり、その上に多彩な文様が描かれ、刻線文様で装飾性豊かな多彩釉刻線文陶器が作られる。そうした中央アジアの施釉陶器を代表するのは、サマルカンドやタシュケント等で作られたウズベキスタンの多彩釉（刻線文）陶器である。素地上に白化粧土を施して刻線文を描くと、白地に赤い

線文様が浮かび上がる。11～12世紀頃、中央アジア各地で地域ごとの特色が目立つようになり、その伝統を受け継ぐ陶器は現在も作られている。しかしまだ、地域色が生まれる直前の誕生時の陶器生産様相は不明瞭である。

具体的な資料に欠けるけれども、9世紀から10世紀にイラク多彩釉陶器がイランや中央アジアにも運ばれ、その地域に住む人々は生活のなかで多彩釉陶器を使用したと推定される。中央アジアもバグダッドに都を置いたアッバース朝領内であり、とくに都市に住む人々は、多彩釉陶器を入手する機会に恵まれ、文様を描く美しい色彩の皿や鉢を日常的に使う楽しみを味わうことができたのであろう。

中央アジアの支配者は、多彩釉陶器を自らが居住する都市に輸入して使うだけでなく、自らが住む都市でも作ることを望み、イラクから陶工を招いたと推定される。こうして、職人の移動や新たな陶工の誕生によって、9世紀末から10世紀初めころに彩釉・多彩釉陶器が中央アジアで作られ始めたと推定される。当初の陶器の形態はイラク陶器と類似する平たい皿や盤、深めの鉢であり、緑釉流し掛け陶器や多彩釉陶器が当初製品と推定される。

中央アジア施釉陶器の誕生を、1) 支配者居住の都市にイラク陶工を招いた、2) 盛んな領内貿易に関わったアラブ商人が産業を興すことに関わった、3) 東イラン地域の施釉陶器生産と中央アジア施釉陶器生産が関係した、という仮説も考えられる。1)と2)はイラクと中央アジアの陶器及び陶工が直接に関係したことになる。筆者は9世紀後半から10世紀前半の時代はイラクと中央アジアが直接に施釉陶器生産で関連し、東イランが関連するのは10世紀から11世紀のことと考えている。

10世紀から11世紀には、中央アジア施釉陶器の文様は中央アジアに独特の美術民芸的な製品に変化している。トルクメニスタンやカザフスタンでは、初めは緑釉のみの簡単な技術の緑釉陶器が多く作られたが (Sasaki H., Sasaki T. 2014)、ウズベキスタン地域は少し様相が違っていた。

ウズベキスタンでは、黄色や赤色の素地の上に白い化粧土を塗り、その白色上に鮮やかに豊かな色彩の文様を描き、さらに上に透明釉を掛けた陶器を作った。化粧土上に刻線文で文様を描く技術も取り入れた。それは中央アジアを代表する大量生産品としての彩釉陶器を地域内に定着させた。代表的な産地はサマルカンドやタシケントなど地域の中心となる都市である。今は遺跡になった失われた都市跡でも生産されており、遺跡の発掘では、円形外壁にレンガを積み上げた窯跡が発見される。その窯跡内部壁表面の同じ高さに連続した穴を穿ち、その穴に長い土製棒を差し込んで平坦面を作り、棒の上に乾燥させた陶器を三叉トチンで重ねて置き、彩釉陶器を焼き上げている。

5. 中央アジア施釉陶器素地の化学分析と産地推定

(図 17. タシケント出土分析資料。図 18. サマルカンド出土分析資料。図 19. テルメズ出土分析資料。図 20. パーミヤーン出土分析資料。図 21. 主要元素・微量元素組成散布図。図 22. タシケント、サマルカンド、テルメズ、パーミヤーン分析資料素地 cross 写真。)



Glazed pottery from Binket archaeological site in Tashkent, Uzbekistan

図 17 タシュケント出土分析資料

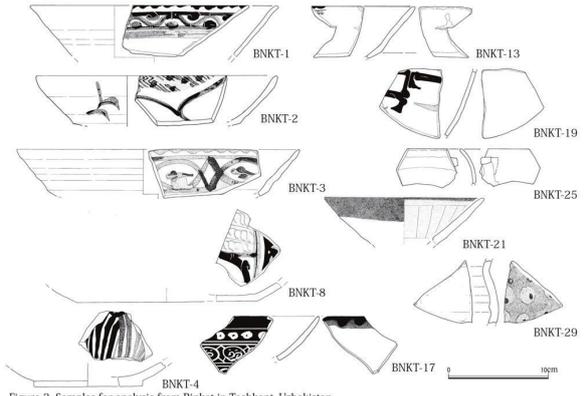


Figure 3 Samples for analysis from Binket in Tashkent, Uzbekistan



図 18 サマルカンド出土分析資料

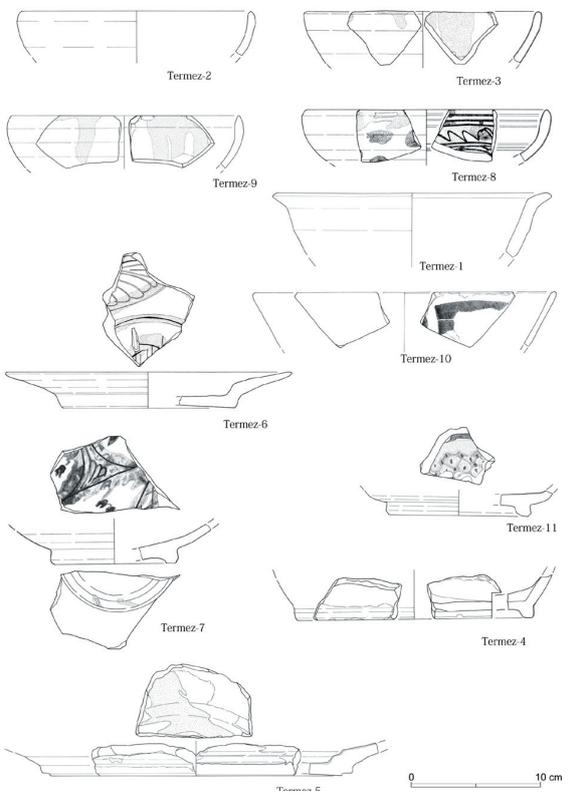


図 19 テルメズ出土分析資料



図 20 バーミヤーン出土分析資料

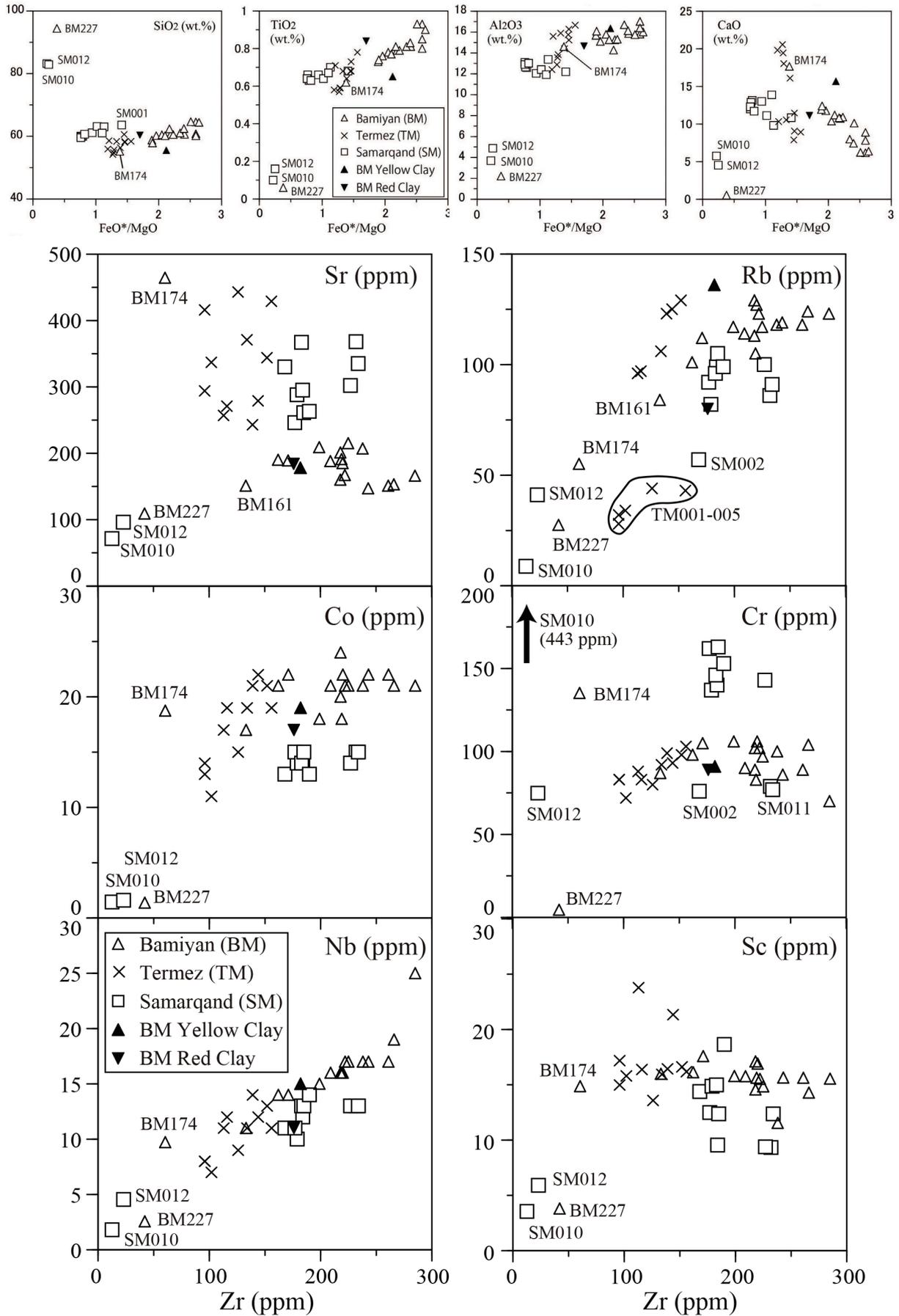


図 21 主要元素 (上)・微量元素 (下) 組成散布図

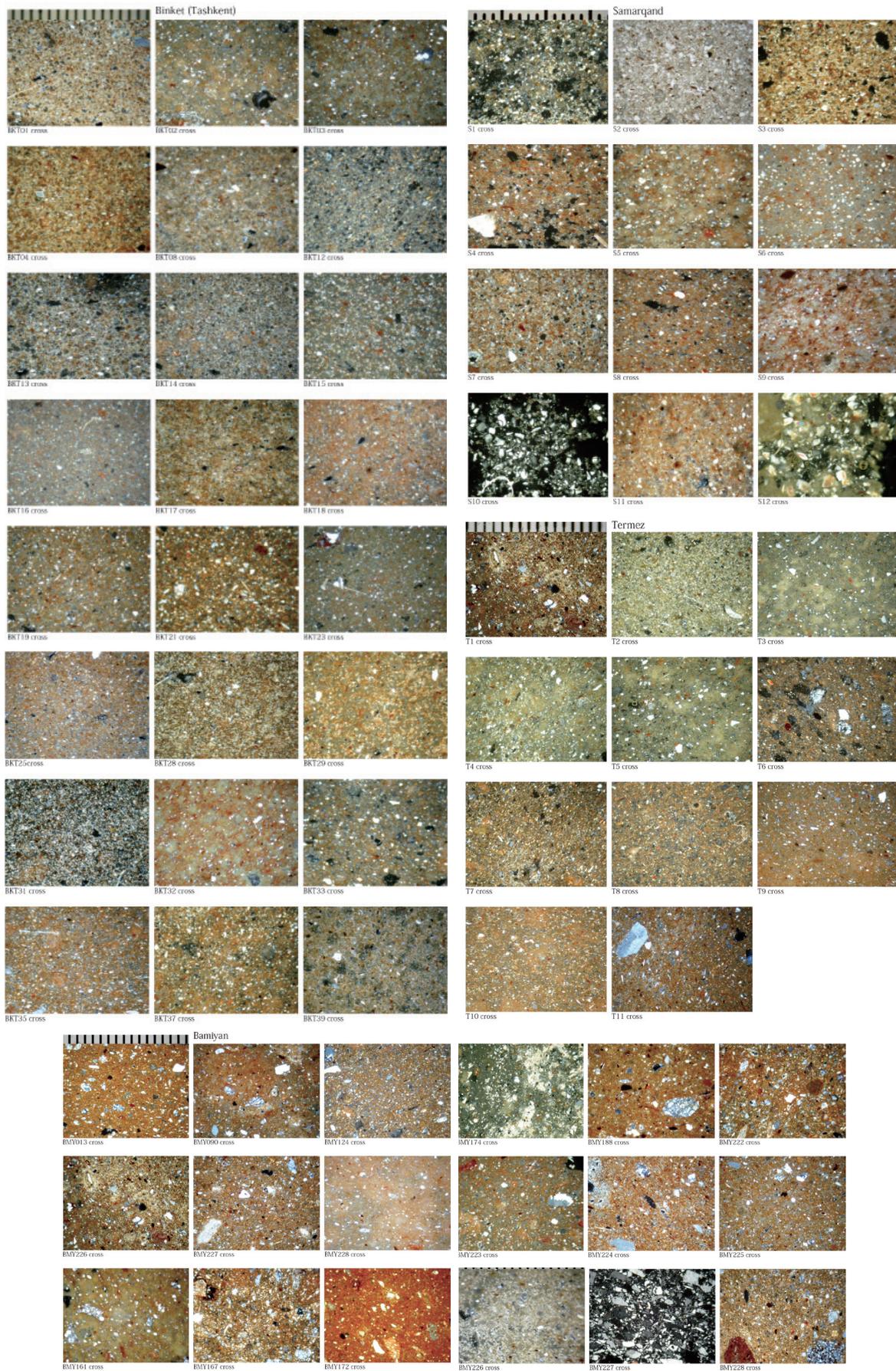


図 22 タシュケント、サマルカンド、テルメズ、パーミヤーン 分析資料素地 cross 写真

中央アジアは他の地域と比較すれば、いずれの産地も他産地と類似性の高い製品を作る。タシケントやサマルカンドなどでは文様の比較で産地が特定できない場合もあるが、バーミヤーンは表面的な観察で他と容易に区別できる。

陶器の産地を推定する方法の一つに、素地の化学分析がある。タシケント、サマルカンド、テルメズ、バーミヤーンは北から南に 200km ほどずつの距離がある。それら 4 カ所の遺跡から出土した陶器素地の微量元素 trace element と主要元素 Major element を化学分析して比較し、次の結論を得た (Sasaki, Koezuka, et al 2009. Sasaki, Koizumi, et al 2012)。それらはほぼ同じ生産技術様相を示すが、素地構成に違いが見える。考古学肉眼観察では発見された陶器はその遺跡のある地域で作られたと見えた。バーミヤーン陶器は地域内の粘土を使ったことも証明できた。ほんの僅かな陶器のみがシルクロードを通して他地域から運ばれているが (佐々木, 佐々木 2007)、多くの日常生活用陶器は生産地と使用地が同じである (佐々木花, 佐々木 2010. 佐々木, 佐々木 2010. 佐々木, 他 2008)。

いわゆるシルクロードを多くの物資が行き交ったと言う人もいるが、遺跡出土の陶磁器から見れば、陶磁器の多くはそれぞれの地域内で現地粘土を用いて作られ使われている。日常生活品と奢侈品の違いがそれぞれの種類の流通範囲を決めている。住居など建材なども地産地消である。

分析資料の多くは 10 世紀、11 世紀及びそれ以降の製品と推定できる。中央アジアで施釉陶器が誕生した頃の 9 世紀と推定される陶器は、白濁釉陶器と白濁釉陶器緑彩陶器であり、その資料番号はテルメズ 1-5 の白濁釉陶器及び白濁釉緑彩陶器、サマルカンド 9 の白濁釉緑彩陶器碗、タシケント 32-34 の白濁釉緑彩陶器碗である。バーミヤーンには 9 世紀と推定できる製品はなく、10/11 世紀から 13 世紀の資料である。テルメズ 7-10 は 10 世紀と推定でき、イラク製品と離れて中央アジア陶器に変化した製品である。テルメズ 9-10 世紀の白濁釉陶器碗は、口縁端部が外反する 1 を除いて内湾形であり、イラク白濁釉陶器碗と異なる器形でテルメズ産白濁釉の可能性はある。1 も素地厚さがイラク白濁釉陶器碗素地より厚く、産地の違いを表している。白濁釉陶器碗の器形は、中国白磁外反口縁碗を写したイラク産と、それらを写さずに内湾形を主とする中央アジア白濁釉陶器碗の違いがある。サマルカンド 3-7 は 10/11 世紀であり、16-17 世紀の製品も含まれる。タシケントは 10/11-12 世紀が主であるが、9 世紀から 17 世紀までの資料である。

陶器の産地を推定する他の方法として、剥片素地の偏光顕微鏡観察がある。産地による粘土の違いを具体的にみることができる。

6. 初期中央アジア彩釉陶器—白濁釉・緑彩 (緑釉線彩・点彩)・多彩釉—

唐代白磁はイラク白濁釉陶器に刺激を与え、金属器を模倣した白磁碗器形がイラク白濁釉陶器碗の器形を変化させ、新たな流行をアッバース朝に生み出した。その白い器面に釉で色彩と文様を描き、刻線文も施し、イラクで流行した多彩釉刻線文陶器が生まれた。同時に緑彩陶器も作られた。その技術が陶工の移動に伴ってイラン高原地域、東イラン、中央アジア各地に短期間に広がり、中央アジア彩釉陶器の生産基盤が確立されたと推定し

ている。

彩釉陶器の技術移転の経路に関する研究は無いが、中央アジアで新たに国を興した支配者が都市生活を支える各種職人を旧首都などで獲得し、自ら整備した都市に移住させたのであろう。以後、ウズベキスタンの彩釉陶器は中央アジアを代表する装飾性豊かな陶器に発展し、現在も多彩釉陶器が作られ、中央アジアの風土と文化を代表する地域伝統文化財の一つとなる。

その系譜は中国、イラクを経て、中央アジア地域内の起源となった9世紀後半から10世紀前半の陶器に求められる。10世紀から11世紀頃にサマルカンドやタシュケントの多彩釉陶器は、イラン高原、東イラン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、アフガニスタンなどの地域の陶器生産と関連しながらも地域色を深めた陶器がより広い地域で新たに作られ、文様は変化しながら継続して使われる。

唐代白磁がイラク白濁釉陶器に刺激と影響を与え、コバルト藍彩陶器やラスター彩陶器以外に、緑彩陶器と多彩釉陶器も発展し、そのイラク彩釉陶器の技術が中央アジア緑彩陶器（いわゆる緑釉流し掛け陶器、以後緑釉点彩陶器、緑釉線彩陶器）と多彩釉陶器を生んだという生産系譜を想定して、ここまで述べてきた。イラクとイラン、中央アジアの陶器生産の技術移転と交流については推定部分が多く、考古学資料で実証的に確認した部分は少ない。次に、中央アジアの白濁釉陶器、緑彩陶器（緑釉点彩陶器、緑釉線彩陶器）、多彩釉陶器という3種類の施釉陶器を再び見ることにする。

白濁釉陶器

唐代白磁の器形は唐とイランの金属器に類似するものがあり、その相互の関係性は推定可能である。唐代の越窯や長沙窯の製品と比べ、白磁のインド洋貿易に関わる研究はまだ少なく、不明瞭な部分が多い。イラクで白濁釉陶器生産に関わる窯跡発掘情報は無い。

イラクで白濁釉陶器が量産されると、コバルト彩白濁釉陶器（藍彩陶器）が作られ流行するが、中央アジアで藍彩陶器の出土量はきわめて少なく、藍彩陶器の模倣生産はほとんど無かった。コバルト顔料の入手が難しかったか、初期製品では藍彩陶器が作られなかったのであろう。ラスター彩陶器も中央アジアで作らないのは技術的に難しいからであろう。黄釉のラスター彩模倣品は見られる。口縁が内湾する白濁釉陶器碗はテルメズ出土の分析資料にある。イラクの白濁釉陶器碗の影響を受けてテルメズで作られたと推定でき、緑彩や刻線文などによる文様を施していないことから9世紀後半頃と推定できる。

緑彩陶器

中国の北魏・北齊・隋の時代、すなわち唐代初期頃には白釉緑彩磁器が北齊の墓から出土しており、きわめて珍しい品である。河南省鞏義市白河窯と推定される。類品もなく、当時は海上交通の直接貿易もなく、イラクに白釉緑彩陶器もない。この技術の影響がイラクに到達したとは思えない。

サマラ出土のイラク緑彩陶器碗の口縁部は外反するものと内湾するものがあり、外反口縁碗が多い。サマラ資料334は中国緑彩磁器碗で、内湾する内面に棒状の粘土を貼付けており、この点は金属器碗写しの河北省白磁と類似する。しかし、碗形が内湾する点は河

北・河南のいずれの白磁も外反しているのと異なる。中国の緑釉線彩磁器は陝西省、河北省、河南省で見られるが、河南省が中心的な産地であろう。中国緑釉流し掛け（緑釉点彩、線彩）磁器碗はサマラ、サマルカンドでも出土し、イラク緑彩陶器碗に器形と文様の点で模倣されたが、模倣された時点で棒状粘土貼付けは失われている。このイラク緑彩陶器碗の文様と器形はテルメズ、サマルカンド、タシュケントの9世紀分析資料にもあり、イラク緑彩陶器が中央アジアで最初期に模倣生産された可能性が高い。

サマルカンドのアフラシアブ遺跡で出土した緑彩陶器碗の器形は口縁内湾で刻線文を施すものが多い。イラクに多い口縁外反の白濁釉陶器碗形と異なる緑彩陶器の口縁内湾器形を写し、イラク緑彩陶器に無い刻線文を施し、各技術を変化融合させている。テルメズ分析資料の白濁釉陶器内湾形碗に緑釉を施せば緑彩陶器碗となり、その分析資料には緑彩も見える。イラクで白磁碗口縁外反形を写した白濁釉陶器の器形ではなく、中国緑彩磁器を写した内湾形の白濁釉緑彩陶器が中央アジアで模倣生産され、イラク緑彩陶器の内湾器形と文様が中央アジア緑彩陶器碗に引き継がれている。中央アジアの緑彩陶器で多い種類は緑釉線彩陶器で、いわゆる流し掛けが線状に描かれている。緑釉点彩陶器は非常に少ない。

藍色に発色するコバルト顔料ではなく、緑色に発色する銅顔料はアッバース朝周辺の広い地域で長期間に亘って用いられた簡単な技術であり、化学分析資料のテルメズ、サマルカンド、タシュケントにも含まれる9世紀の白濁釉緑彩陶器碗がその例になる。9世紀末から10世紀初頃には中央アジアでも緑彩が基本的な装飾用顔料になり、銅（緑色）以外には鉄（黄色）とマンガン（黒色）も用いられた。なお、イラクと違って中央アジア産の素地は赤色が主であり、初期施釉陶器の藍彩は稀である。

多彩釉陶器

晩唐三彩と呼ばれた緑彩磁器がイラクで緑彩陶器の緑釉線彩陶器を生み、それが中央アジアで緑彩陶器（いわゆる緑釉流し掛け陶器、緑釉線彩陶器）を流行させ、その碗器形は内湾形であることを述べてきた。

多彩釉陶器はビザンチン陶器からの影響を無視できないが、本稿はその関係性について触れていない。刻線文は金属器やビザンチン陶器、中国の越窯や白磁の刻線文とも関連することを推定させるが、関連性は複雑であって影響関係を単純に描くことは難しい。イラクで発展した多彩釉陶器・緑彩陶器の生産技術は、サマルカンド支配者や貿易商人により陶工がサマルカンドなどへ移って伝わったと推測できるが、その証拠を遺跡と出土品で確かめることは課題である。中央アジア各地域の多彩釉陶器・緑彩陶器に関する比較研究も少なく、相互の関連性や影響関係も不明な部分が多い。

中央アジア彩釉陶器

本稿は中央アジア施釉陶器の誕生に関わる技術的系譜を描いた。そのなかで、イラクとサマルカンドを直接に結ぶ部分が、サマラとサマルカンドの遺跡出土品比較によって解明可能であろう。

イラクと中央アジアに見られる緑釉線彩陶器と緑釉点彩陶器、薄い彩釉を施したメソ

ポタミアの多彩釉刻線文陶器が、両地域の遺跡出土品の関係を比較する資料として注目される。サマルカンドの初期施釉陶器と推測できる緑釉線彩陶器は、緑釉を器面内面に線状に描き散らしたものの、緑釉あるいは褐釉の線を放射状に器面内面に描いたもの等がある。多彩釉で放射状に器面内面を描いたもの、刻線文を併せ用いたものは、時代的にその次の段階の10世紀になるのであろう。サマラとサマルカンドで出土する緑釉線彩・点彩陶器の比較研究を継続することは研究課題である。

すでに問題点のいくつかは考古学資料を用いて筆者が個々の論文で論じた。イラクと中央アジアの間を埋める説明は推定が多いが、その生産技術を比較して系譜を述べたことがあり (Sasaki T. 2009)、新たな研究視点と最近の調査成果を加えて、中央アジアの陶器生産拠点への選択的な技術移動を再論した。

結論

中央アジアの施釉陶器誕生は、中国白磁が8世紀後半にイラクに運ばれ、白濁釉陶器生産拡大に影響したことが緒言となる。8世紀後半から9世紀、唐代の河北省と河南省で異なる形態の白磁が工業的な特産品となった。アッバース朝のバグダッドやサマラの都市生活が向上し、良質の日常物資の需要が高まり、アジアの東西を支配した唐とアッバース朝を結ぶインド洋遠距離海上貿易が盛んとなり、多くの物資に混じって白磁も運ばれ、支配階層や富裕層が日常生活で用いた。

イラクに住む一般人は白磁の入手が難しかった。白濁釉陶器を作る技術は既にメソポタミアにあり、白磁の釉質と器形を見て写し、白濁釉陶器を量産した。中国から人の移動は無かった。白濁釉陶器素地は現地の黄白色軟質土を用い、釉の白さは石英粒の乱反射により、錫呈色による白さはやや遅れて広まった。白濁釉陶器碗は河北省鞏義市白磁碗の器形に似るが、河南省白磁はイラクで模倣されなかった。

9世紀のイラクで好まれた白い器、白濁釉陶器は装飾文様を描く下地として利用され、藍彩陶器、緑彩陶器、ラスター彩陶器、多彩釉陶器などが作られた。多彩釉陶器に8世紀前半唐三彩の影響はなく、晩唐五代のいわゆる三彩(2種類の緑彩、緑釉点彩磁器と緑釉線彩磁器)がイラクに影響を与えた。消費地の大都市が産地で、緑彩から多彩に変化するイラク彩釉陶器は、中央アジアで9世紀末から10世紀初に生まれた多彩釉刻線文陶器の祖型の一つとなった。イラクで流行した藍彩陶器とその外反する碗の器形を9世紀の中央アジア初期施釉陶器は模倣せず、イラクで中国緑彩(緑釉線彩)磁器写しのイラク緑彩(緑釉線彩)陶器碗口縁内湾形を模倣し、顔料入手が容易な緑彩を施した陶器が中央アジア初期製品となった。碗の他には屈曲が目立つ大皿・大盤にも多彩釉と刻線文を施した陶器を作る。

次いで、10世紀から11世紀に中央アジアで多彩釉(多くは刻線文を入れた)陶器が大量に作られ使用され、黄色や赤色の素地上に白化粧土を塗り、その白色器面上に鮮やかで豊かな色彩の文様を描き、上に透明釉を掛けた。いずれの産地も似た製品を作るようになるが、施釉陶器素地を化学分析すると産地分類が可能である。タシケント、サマルカンド、

テルメズ、バーミヤーンの遺跡出土陶器素地の微量元素と主要元素を化学分析した。類似の様相を示すが、詳細に見ると素地構成が違う。それぞれの地域の陶器は遺跡のある地域で作られ、町の市場で販売された。バーミヤーンの陶器は地域内の粘土を使ったことも確かめた。シルクロード地域であっても、僅かな陶器のみが他地域から運ばれ、日常生活用陶器は生産地と使用地が同じであった。

中央アジアの施釉陶器は白化粧土が掛けられ、白い器面に釉で文様を描き、刻線文を施して透明釉をかけた多彩釉刻線文陶器が 10 世紀から 11 世紀に流行し、中央アジア施釉陶器を代表するようになった。その技術と河北省磁県が代表する磁州窯は類似し、関係が推測される。技術交流が続く。

その前段階の 9 世紀後半から 10 世紀初の中央アジアの施釉陶器起源を述べたのが本稿である。

References (英語・中国語・日本語に分け、年代の新しい順に配置した)

English:

- Sasaki, H., & Sasaki, T., 2014, Turkmenistan medieval ceramics: Similarity and deference with Central Asian ceramics, *The 21st Annual Meeting of Japan Society for Hellenistic-Islam Archaeological Studies*: 21, 159-176.
- Sasaki T., Koizumi K., Sasaki H., 2012, Classification of Archaeological Ceramics from Afghanistan and Uzbekistan by X-ray Analysis, Wan 王 & Zhou 周 eds., Science and Technology of ancient ceramics 8, *Proceedings of the 2012 International Symposium on Ancient Ceramics (ISAC'12)*, 82-83, Shanghai Research Society of Science and Technology of Ancient Ceramics, Shanghai.
- Sasaki, T., & Sasaki, H., 2011, Excavations at A'Ali Islamic site, *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa*, 32: 18-46.
- Sasaki, T., 2009, Mutual influence and imitation of Mesopotamian and Chinese ceramics in the ninth tenth centuries, "Scientific Research on Historic Asian Ceramics –Proceedings of the Fourth Forbes Symposium at the Freer Gallery of Art-" *Archetype Publications 2009*, Freer Gallery of Art, pp.149-162, Washington DC.
- Sasaki, T., Koizumi, K., Sasaki, H., Tamura, A., Arai, S., 2009, *Chemical Analysis of Bamiyan Ceramics and Its Provenance*, (羅・鄭 主編) 『'09 古陶瓷科学技術 7 国際討論会論文集』上海科学技術文献出版社, 181-193.
- Sasaki, T., 1996, Umayyad and Abbasid finds from the 1994 excavations at Jazirat al-Hulayla, *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa*, 23: 179-222.
- Sasaki, T., 1995, 1994 Excavations at Jazirat al-Hulayla, Ras al Khaimah, *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa*, 22: 1-74.
- Sasaki, T., Shirahata H. and Yamasaki, K., 1994, Lead Isotope Ratios of the White Glazes of the Sherds Excavated at A'Ali, an Archaeological Site in Bahrain, *Proceedings of the Japan Academy*, 70, Series B:1-3.
- T.Sasaki, T.Uchida, T.Koezuka, S.Ninomiya, H.Shirahata, H.Sasaki and K.Yamasaki, 1994, Technical Studies on the White-glazed Shards Excavated from A'Ali in Bahrain, *Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa* 金沢大学考古学紀要, 21:126-136.

Sasaki,T., Uchida,T., Koezuka,T., Ninomiya,S., Osawa,M., Yamasaki,K.,1993, Technical Studies on the White-glazed Sherds Excavated from the Archaeological Site, A'Ali in Bahrain, *Proceedings of the Japan Academy*,69, Series B;35-38.

Sasaki,T., Koezuka,T., Ninomiya,S., Osawa,M., Yamasaki,K.,1992, Excavations of Archaeological sites in Bahrain and the United Arab Emirates and Studies on the Excavated Sherds, Guo Jinkun ed. "Science and Technology of Ancient Ceramics", *Shanghai Research Society of Science and Technology of Ancient Ceramics*. 230-234, 上海科学技术文献出版社, 上海.

Chinese:

佐佐木達夫, 佐佐木花江, 2002 「唐代外銷白瓷影響的斯蘭白陶」『中国古代白瓷國際學術檢討會論文集』上海博物館, 368-369.

Japanese:

佐々木花江, 佐々木達夫, 2010 「バーミヤーン産施釉陶器とウズベキスタン陶器」『第 17 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』 33-45.

佐々木達夫, 佐々木花江, 2010 「シャハリ・ゴルゴラ 2008 ～ 2009 年地雷撤去に伴う採集陶磁器予備カタログ」『金沢大学歴史言語文化学系論集史学・考古学篇』 2:179-236.

佐々木達夫, 2009 「ユーラシア大陸における陶器生産技術の拡散と地域性」『物質文化史学論聚—加藤晋平先生喜寿記念論文集』北海道出版企画センター, 315-328.

佐々木達夫, 佐々木花江, 野上建紀, 2008 「バーミヤーン出土のイスラーム陶器」『金沢大学考古学紀要』 29:1-30.

佐々木達夫, 2007 「シルクロードのイスラーム陶器研究」『土車』 115:3.

佐々木達夫・佐々木花江, 2007 「中央アジア陶器の共通性と地域性」『第 14 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』 36-44.

佐々木達夫, 佐々木花江, 2002 「アッバース朝白濁釉陶器に与えた中国白磁碗の影響」『金沢大学考古学紀要』 26:64-75.

佐々木達夫, 佐々木花江, 2000 「ハレイラ島の発掘—1998 年—」『金沢大学考古学紀要』 25:118-169.

佐々木達夫, 1999 「イスラームの染付」『東洋陶磁』 28:43-54.

杉村棟, 佐々木達夫, 1999 「中央アジアの陶磁器」『シルクロード学研究』 7:5-18.

杉村棟, 佐々木達夫, 1999 「カザフスタン・オトラル遺跡陶器調査報告」『シルクロード学研究』 7:46-53.

佐々木達夫, 野上建紀, 1999 「トルクメニスタン出土陶器調査報告」『シルクロード学研究』 7:104-145.

佐々木達夫, 1995 「1911-1913 年発掘のサマラ出土陶磁器分類」『金沢大学考古学紀要』 22:75-165.

佐々木達夫, 酒寄淳史, 酒井中, 楠寛輝, 1998, 「画像処理法による陶磁器素地の定量化と産地推定」『金沢大学考古学紀要』 24:209-223.

佐々木達夫, 1995 「1911-1913 年発掘のサマラ出土陶磁器分類」『金沢大学考古学紀要』 22:75-165.

佐々木達夫, 内田哲男, 肥塚隆保, 二宮修治, 大沢真澄, 白幡浩志, 山崎一雄, 1993 「バハレン島アール遺跡出土の白釉陶片の科学的研究」『日本文化財科学会第 10 回大会研究発表要旨集』 50-51.

佐々木達夫, 1993 「イスラームの白釉は錫釉か」『陶説』 488:15-19.

佐々木達夫, 1987 「バンボール出土の中国陶磁器と海上貿易」『シルクロード美術論集』 吉川弘文館, 225-258.

本稿で用いた図は筆者作成で、以下の筆者論文の図から抜粋して引用し、いくつかの図を組み合わせて新たな図とした。図1 佐々木 2009, Sasaki 2009. 図2 佐々木, 佐々木 2002. 図3 佐々木 1995. 図4 佐々木 1995. 佐々木, 佐々木 2002. 図5 佐々木 1995. 佐々木, 佐々木 2002. 図6 Sasaki 1996. 佐々木, 佐々木 2002, Sasaki & Sasaki. 2011. 図7 佐々木 2002. 図8 佐々木 2002. 図9 佐々木 1995. 図10 佐々木 1995. 図11 佐々木 1995. 図12 佐々木 1995. 図13 Sasaki 1996. 図14 Sasaki 1996. 図15 佐々木 1995. 図16 佐々木 1995. 図17-21 Sasaki, et al 2009, 2012. ただし、図22は未発表図